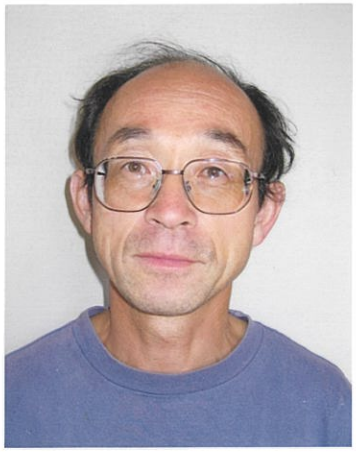
平成１２年度認定　（No.14）

農業名人

（トルコキキョウ名人）



伊東（いとう）　茂男（しげお）

昭和25年生まれ

伊那市東春近榛原在住

パステル紫は永遠のテーマ

大学を卒業後、奈良県の種苗会社へ就職した。配属は野菜の営業だった。どうしても生産の現場がやりたくて、埼玉県の種苗会社へ転じた。

一生会社勤めをする気はなかったので、昭和５８年に家内の実家へ入った。両親はふじ、つがるの果樹経営だった。

当時全農では、県内にトルコキキョウ農家を育成していた。トルコキキョウという花はよく知らなかったが、種苗会社時代に紫の品種の種をもらって保存しており、この花とは縁があったかもしれない。全農の塚田晃久さん、試験場の山本宗輝さんからトルコキキョウの生理生態を教えていただいた。

購入種子（品種）にだけ頼っていては、いつまでも産地は安定しないし、面白くない。産地で育種をしていかないと、消費志向から遅れてしまう。

かつてリンドウは長野県がトップシェアだったものが、岩手県に持っていかれた。トルコキキョウもその二の舞とならないよう、更に育種に力を入れたい。県試験場でも、品種をつくった時に、既に時代遅れでは農家が困ってしまうので、県内農家との交流会を活発に行ないながら品種改良に取り組んで欲しい。

育種の成果が出てきたのは、ここ４、5年のことだと思う。この親ならこうなるということが系統的にわかってきた。今までに作り上げた品種は３０種近い。そのうちの２０種ほどが地元上伊那で栽培されている。

上伊那地区で今後、トルコキキョウをどのように販売していくかの戦略が大切だ。いつ出荷しても業務需要があり売れるのは、パステル紫である。これを中心にして、あと変わった品種は皆で少しずつ栽培したらいいと思う。

出荷時期は６月下旬から１１月で、１日に１５００本から３０００本を出荷する。出荷先は、関西・中京圏が７割を占める。

一般の皆さんもトルコキキョウを作ってほしい。６月中旬から７月いっぱいなら、上伊那産のトルコキキョウの苗を小分けできるので、企業や行政でも普及啓発事業の小道具として活用していただければありがたい。また７月から８月は、都会の人の花作り体験も受け入れたい。切り花・交配・定植の管理と仕事はいっぱいある。都会からも多くの人に来てもらい、花を咲かせるのにどんなに時間がかかっているか、体験して欲しい。歓迎しますよ。

作業所には、気温、地温を管理するためのデータが記入された４年間のカレンダーがつるされていた。